

エジプト・アラブ共和国

1. ムバラク大統領の長期政権崩壊
2. 首都カイロ
3. 砂漠の国エジプト
4. カイロの商店街
5. カイロのビル街
6. 農村風景
7. 観光地ピラミッド
8. 政治家と官僚の腐敗
9. エジプト旅行 カイロとアスワン
10. アブ・シンベル大神殿
11. ナイル川クルーズ
12. ルクソール
13. アレキサンドリア
14. エジプト文明
15. これからのエジプト

一般事項

国・地域名:	エジプト・アラブ共和国 (Arab Republic of Egypt)
面積:	1,001,500km ² (日本の約2.6倍)
首都:	カイロ
宗教:	イスラム教92%、コプト・キリスト教6%
人口(2009年):	7605万人(2009年1月)
通貨:	ポンド
公用語:	アラビア語
気候:	3月から5月は“ハシムーン”と呼ばれる砂嵐がよく発生する。 6月から9月は特にルクソールやアスワンでは平均気温40度を越える猛暑となり雨はほとんど降らず乾燥している。 10月から11月は30度を切る日もあり、日本の秋のようで過ごしやすい。 12月から2月は温暖で過ごしやすいが朝夕はかなり冷え込む。
一人当たりの GDP:	2,450ドル(2009年)

日本との関係

主要輸出品目	自動車:(乗用車、バス、トラック、(19.9%)、原動機(18.8%)、鉄鋼(10.1%)、建設用、鉱山用機械(6.6%)
主要輸入品目	液化天然ガス(55.2%)、石油製品(32.1%)、織物用糸、繊維製品(1.8%)、衣類(1.5%)、果実(1.3%)

1. ムバラク大統領の長期政権崩壊

ニュースでご存知のとおり、今年になって食料価格の高騰がきっかけで、チュニジアでの政権崩壊が飛び火し、エジプトをはじめ、アラブ諸国の各地、アルジェリアやヨルダン、バーレーン、イエメン、リビア、シリア、サウジアラビアなどでも反政府デモが拡大しております。

特に1月末、エジプトのカイロでは、ムバラク大統領の長期政権や失業問題など不満が噴出、ムバラク大統領の辞任、生活の改善、憲法の見直しなどを求めて、18日間に亘る、大規模なデモが発生したことは記憶に新しいことです。

30年近くに亘って政権を握っていたムバラク大統領は、ついに2011年2月11日に退陣し、長期政権は終わりを告げました。市民が政府を倒し、民主的な政権の移行に期待していますが、この騒動は観光にも大打撃を受け、市民生活にも大きな影響を受けました。

奇しくも丁度1年前の、デモが始まった同じ日に、私達は念願かなってエジプト旅行に出発いたしました。まさか1年後にこんなふうに政権が崩壊するなど思ってもいませんでしたが、その折私なりに色々感じたこと、考えさせられたことをお話させていただきます。

2. エジプトの首都、カイロ

エジプトは成田からエジプト航空直行便で約14時間45分と、遠い国ではありますが、石油供給国として、今回の騒動はわれわれ日本にも即石油高騰という形で少なからず影響を受けております。

エジプトはその5000年のときを越え、古代の息吹をじかに感じられる国、また、巨大なピラミッドなどエジプト文明を开花させ、世界遺産の宝庫としても知られており、私にとってエジプトは驚異と不思議がいっぱいの国として、長い間興味津々、いつか自分の目で見たいと思っていました。

首都のカイロはエジプト文明発祥の地として古い歴史を持ち、ナイル川をはさんで東側に新市街、イスラム地区があり、西側の旧市街にはピラミッドやスフィンクスのあるギザがあります。町は新旧一体となり、ヨーロッパとアフリカの文化がミックスされ、国際色豊かな賑わいを見せています。

3. 砂漠の国エジプト

エジプトの面積は日本の2.65倍、ガイドさんの話ですと、その広大な土地の殆どの95%が不毛の砂漠地帯で、ナイル川沿いのわずか5%に人口が集中しているそうです。その中でも人口は都市カイロに集中し、エジプト政府は人口の地方分散化を図っているとのことですが、なかなかはかどっていないとのこと。

それは、ルクソールからカイロへ向かう国内線の機内から外の景色を見て、実感いたしました。約2時間の飛行中、どこを見ても砂漠ばかり。その中を緑の細いベルトが一筋見え、それがナイル川で、そのナイル川沿いにのみ緑の樹木が見えていました。

4. カイロの商店街

カイロ市内では都市部の人口流入に伴う、慢性的な交通渋滞がひどく、いつもツアーの添乗員さんを悩ませているようです。私達のときも余裕を見て出発しているにも拘らず激

しい渋滞に巻き込まれ、飛行機の時間に間に合うかどうかははらいたしましたが、渋滞のお陰で、バスの中から町の様子をいろいろ見ることができました。

カイロ中心地の商店街では人々があふれており、活気に満ちていました。特に印象に残っているのは洋品店です。極彩色の服は勿論ですが、女性用の下着がこれでもかこれでもかと前面に飾ってあり、カラフルでそのデザインはちょっと目のやり場に困るほどのセクシーさ。これはイスラム教の女性が着る、“チャダール”という、目だけ出して、頭からすっぽり全身を隠す、あの衣装の反動なのではと思いました。街行く女性はそういう姿が多くみられたからです。

インドネシアでも時々見かけますが、いったいあの中はどうなっているのだろうといつも思っていたのですが、きっと家の中では開放感あふれた、カラフルで華やかな服を身に着けているのだろうと思いました。

5. カイロのビル街

街中のビルはまだ建築中が多く、その割には古く、それらのビルには既に沢山の人が住んでいるようで、ビルの屋根には柱やさびた鉄筋がニョキニョキと空に向かって突き出ていました。私達日本人からみると、そんな未完成なビルに住むなんて考えられませんが、エジプトでは当たり前のように、お金が出来たらその上にビルを継ぎ足していくのだとのことでした。

6. 農村風景

しかし、都会を一步はなれると、ナイル川に沿ってナツメヤシや畑が広がり、のんびりした農村風景の中、昔、絵本や映画の中で見たのと同じ、頭にターバンを巻き、長い服を着た人がロバに荷物を運ばせている姿を良く見ました。まるでタイムスリップしたような気分でした。人々の暮らしはあまり豊かには見えませんでした。

7. 雨が極端に少ない砂漠の国ですから、どこへ行っても埃っぽく、街はけしてきれいとはいえませんが、特にギザ地区のピラミッド見物では“らくだに乗って九つのピラミッドの絶景ポイントへご案内”というので、とても楽しみにしていて、それはまあ大変良かったのですが実はがっかりしたことがありました。

というのは、砂漠の中はペットボトルやビニール袋などゴミだらけで、目を覆いたくなるほどでした。ゴミを平気で捨てる、我々観光客のマナーも悪いのですが、世界に誇る七つの世界遺産を持つ観光立国として、ゴミ問題などこれはもう基本的なところから見直す必要があるのではと思いました。

8. 政治家および官僚の腐敗

現地のガイドさんの話では政治も腐敗しきっているようです。何か問題が起きても全てはお金が解決。上層部の人には私腹を肥やすばかりで、年々貧富の格差は広がるばかり。教育の格差もひどく、やく25%の国民が文盲とのこと。失業率も高く、国民の不満は募る一方だと話してくれました。

私達もそれを実感したことがあります。3泊のナイル川クルーズの途中で下船し、ルクソールのハトシエプスト女王葬祭殿でのこと。夫と私が写真を撮っていましたら、警棒やピストルを持った、立派な格好の警察官がにこやかに近づいてきて、“写真を撮ってあげ

ましよう”と、とても親切に言ってくれました。あちこちに同じように警備をしている警察官なので安心し、カメラを渡し写真を撮ってもらったのですが、最後にお金を要求されたのです。勿論、NO!とはっきり断りましたが、イスラム教のコーランの中に“富める者は貧しいものに施しを”という教えがあるとはいえ、まさか現職の警察官にお金をせびられるとは思っていませんでした。

9. エジプト旅行 カイロからアスワンへ

旅の内容をお話させていただきます。

カイロで、ピラミッドやスフィンクスを見てから、エジプト考古学博物館でツタンカーメンの黄金のマスクなど12万点にも及ぶ、古代エジプト文明の遺品や美術品の展示を3時間に亘って、かなりゆっくり見学致しました。

しかし、今回の騒動の最中に、この博物館の貴重な展示品が幾つか、破壊や盗難の被害にあったとニュースで知りました。本当に残念なことです。これはエジプトだけでなく、人類の歴史にとっても貴重な財産だと思うからです。

その後、寝台列車”ナイルエクスプレス”に乗車し、翌日アスワンに到着、1970年に完成した幅3600メートル、高さ111メートルの世界有数のアスワンハイダムを見学しました。このダムによって、古代から人々を悩ませてきたナイル川の氾濫を防ぎ、国内の電気供給を安定させましたが数々の貴重な遺跡の水没がやむなくされたそうです。

また、花崗岩の産地で、ギザにあるピラミッドの石は、ここから産出されたものだそうです。

10. アブ・シンベル大神殿

アスワンから、時折蜃気楼の現れる砂漠の中の本道を、バスで3時間、260キロを突っ走り、エジプト最南端のナセル湖のほとりに建つ、アブ・シンベル岩窟大神殿を見学いたしました。アブ・シンベル大神殿はアスワンハイダムの建設で、水没の危機にさらされましたが、ユネスコの協力で移転、保存されたものです。帰りはすばらしい満月と、降るような星空の下を再び砂漠の中を3時間バスに揺られ、アスワンに戻り、3泊4日のナイル川クルーズに出発いたしました。

11. ナイル川クルーズ

ナイル川クルーズはとても良かったです。

5000年以上に亘り、エジプト、そして人類の歴史を見つめ続け、アフリカの大地をゆったりと流れ、地中海へと注ぐナイル川は、エジプトという国がナイルによって出来たことを実感させられます。連日、強行軍の旅でしたが、このクルーズは川の流れのように、気分的にもゆっくりさせてくれました。

途中、下船してコム・オンボやエドフという遺跡を見学し、エスナの水門を抜け、最後にルクソールで下船いたしました。

私事ですが、夫はメカニカル・コンサルタント・エンジニアでして、特に水門の専門家なのですが、このエスナの水門は、早く言えば前後に水門を開閉し、船のエレベーターのようなものでして、私達にとって初めての経験で、とても興味深いものでした。

12. ルクソール

ルクソールはナイル川をはさんで、日の昇る東岸(生者の町)と、夕日の沈む西岸(死者の町)とに分かれます。東岸はカルナック神殿、ルクソール神殿や博物館などがあり、駅や市場など賑やかな町となっています。

西岸は岸壁の傾斜を利用して造られた3階建ての、エジプトで初めての女王、ハトシエプスト女王葬祭殿があり、これは古代エジプト建築の傑作といわれています。その奥に王家の谷と言って、盗難を逃れるため深い谷を掘り下げられて造った、歴代のファラオ(王)たちの墓があります。ツタンカーメンの黄金のマスクはここで発見されました。まだまだ発見されていない墓があるとのこと。

13. アレキサンドリア

ルクソールから飛行機でカイロに戻り、カイロからバスで210キロ、地中海に面したリゾート地アレキサンドリアの町に到着。アレキサンドリアは紀元前332年にマケドニア王国のアレキサンドリア大王によって建設され、王朝最後の女王、クレオパトラがいた所として知られている町です。温暖な港町で、この町の人々は大変ビジネスにたけているとのこと。ここでも幾つかの遺跡や市内観光をして、翌日カイロに戻り、有名な異国情緒たっぷりのハン・ハーリ市場を見学、買い物後、エジプトの旅を終え、帰路につきました。

14. エジプト文明

エジプトに人類が移住してきたのは3万年前のこと、この頃からこの地域では雨が少なく、砂漠化が始まり、人々は水を求めて移動し、やがてナイル川の沿岸に定住し、そして紀元前3000年前頃に、ナイル川のデルタ地帯に、早くもファラオ(王)が統治する中央集権国家を形成しました。現代のように電気や機械、コンピューターなど文明の利器が何も無い時代に、ピラミッドや王家の谷、ヒエログリフという古代文字など、高度な文明を発達させました。他にも法律、文学、音楽、美術、芸術などにおいても、世界に先駆けた文明を開化させた国です。

15. 現在のエジプト

エジプトは近年、天然ガスなどの資源開発や石油関連分野における産業多角化、鉄道等交通網整備に伴い、海外からの機器輸入や投資の促進、また、投資誘致に必要なインフラ整備にも力を入れており、日本企業(大塚製薬、日産自動車、YKK、東芝、トヨタ等々)も参入しているとのこと。

エジプトは中東和平問題でパレスチナとイスラエルに協議の場を提供するなど、積極的に関与してきています。2008年12月のイスラエルによるガザ地区攻撃では、調停案を示すなど仲介役を買って出ています。イラク復興支援でも、外相級国際会議をエジプトで開催するなど、中東、アラブ諸国にあって、域内の調停者の役割を果たしてきました。また、観光客は毎年1000万人の大台を維持しており、しかし、今回の政権交代に伴い観光客は激減し、観光事業に大打撃を与えています。

一日も早くエジプトが落ち着きを取り戻し、数ある世界遺産に誇りを持って再び観光客が安心して訪れることの出来る、平和な国になるよう願ってやみません。

南アフリカ共和国

1. アフリカ旅行の目的
2. ヨハネスブルグ空港
3. ビクトリアの滝とジャガランダの花
4. クルーガーナショナルパーク
5. ケープタウン
6. ネルソン・マンデラ
7. ケープ半島
8. 南アフリカにあふれる韓国製品と中国製品
9. アフリカ大陸
10. アフリカの現実
11. アフリカの新しいキーワード
12. アフリカの天然資源
13. アフリカの“若さ”
14. 頭脳流出と頭脳流入
15. 電力不足と安価な輸入品
16. 韓国とアフリカ
17. 中国とアフリカ
18. 中国の戦略と人海戦術
19. 中国の資源外交
20. 輦盛をかう中国
21. 高まる対中国の排斥運動
22. アフリカの経済成長
23. 日本とアフリカ(農業)
24. 日本とアフリカ(製造業)
25. アフリカからの輸入品
26. 積極背に欠ける日本
27. 中国外交の真髄

一般事項

国・地域名;	南アフリカ共和国 (Republic of South Africa)
面積;	1,219,912 km ²
首都;	プレトリア(行政)、ケープタウン(立法)、ブルームフォンテン(司法)
最大の都市;	ヨハネスブルグ
宗教;	キリスト教80%、ヒンドゥー教、イスラム教
人口(2009年);	49,320,000人
通貨;	ランド
公用語;	アフリカーンス語、英語、
気候;	夏季は10月から3月、冬季は5月から8月 一年を通じて気候は比較的温暖で日照時間が長い
一人当たりの GDP;	10,119ドル
主要産業	
農業;	畜産業、とうもろこし、柑橘類、小麦、砂糖、羊毛、皮革類、ワインなどがあり、多く輸出されている。
鉱業;	金、ダイヤモンド、プラチナ、ウラン、鉄鉱石、石炭、銅、クロム、マンガン、石綿。

1. アフリカ旅行の目的

昨年10月に南アフリカへ旅行してまいりました。

10月になると、ジャガランダの紫の花が咲き乱れ、町全体を紫色に染めるという。南アフリカの首都プレトリアに行きたかったのです。プレトリアは昨年6月、ワールドカップが開かれたところです。

それともう一つ、動物の大好きな私はビッグ5と言われる、象、ライオン、豹、サイ、バッファローの五つの大型動物を見るチャンスが最も多いという、クルーガー・ナショナルパークでサファリをするというのが目的でした。

2. ヨハネスブルグ空港

というわけで、サファリなど全くの観光気分で、南アフリカのヨハネスブルグ空港に到着しました。しかし、飛行場に着いたとたん目にしたのは、すさまじいばかりの韓国や中国の巨大な広告や製品ばかり。日本の広告などどこにも見当たりません。

アフリカでの韓国や中国の、圧倒的な存在感を目の当たりにして、正直ショックを覚えました。

今までアジアのどこへ行っても、日本の広告に見慣れていたせいもあるのですが、思わず”日本はどうしちゃったの？これから日本の経済どうなるの？”という、不安な思いを覚えたほどです。

3. ビクトリアの滝とジャガランダの花

ヨハネスブルグで飛行機を乗り継ぎジンバブエに行き、ジンバブエでは世界3大瀑布(北米のナイアガラ、南米のイグアス)の一つ、ビクトリアの滝をハイキングし、樹齢1000年のバオバブの木を見たり、また、翌日にはヘリコプターでザンビア川から水煙をあげて落下する、壮大なビクトリアの滝を空から眺めました。

ジンバブエから2時間、飛行機で再びヨハネスブルグに戻り、そこからバスで2時間、プレトリアの町へ行き、憧れのジャガランダの花を見ました。街中に街路樹として植えられたジャガランダの花は夕日の中で紫からピンクに染まって、とてもきれいでした。

翌日バスで片道5時間、アフリカの大地を走りぬけクルーガー・ナショナルパークへ行きました。やはりアフリカは広い、広い。どっちを向いても地平線が広がります。

広大な景色の中を時折すれ違う車は、鉱物運搬用の二両連結の大型トラックが多く、道路沿いには沢山の採掘場がありました。

砂漠の中に忽然と巨大な中国式の極彩色のお寺のようなものが現れ、なんとそれは中国人向けの大型ショッピングモールとのことでした。

4. クルーガー・ナショナルパーク

夕方、暮れなずむ頃ようやくクルーガー・ナショナルパークに到着。ロビーの近くでは野生の猿や鹿が出迎えてくれました。

翌日早朝から、2万ヘクタールもあるという草原の中をジープでサファリをし、期待に応えてビッグ5をはじめ、沢山の野生動物に会うことができました。特に豹はなかなか目にすることは出来ないそうですが、なんと4回も見る事が出来ました。

何といってもラッキーだったことは、出産直後のキリンの親子に出会ったことです。

生まれたばかりの赤ちゃんが一生懸命に何度も立ち上がろうとする姿は、本当に感動的でした。普通、キリンの赤ちゃんは生まれてから2時間ぐらいで立ち上がり歩けるようになるとのことでした。

5. ケープタウン

再びバスでヨハネスブルグに戻り、飛行機で2時間、ケープタウンへ移動しました。アフリカ大陸の南端に位置するケープタウンは、雄大なテーブルマウンテンに喜望峰などの観光名所を有し、また南アフリカを代表するワインの産地でもあります。ヨハネスブルグもそうでしたが、空から見たケープタウンの住宅地にはどの家もプールがあり、大変豊かに見えました。海に面したケープタウンですが、大西洋の海流の影響で水温は1年中15, 6度と低く、そのため人々はプールで泳ぐとのことでした。しかし、この町も職を求めて地方から人々が集まり、飛行場の近くにはスラム街が広がっていました。政府は国の恥と、このスラム街の移動を計画中とのことでした。

6. ネルソン・マンデラ

ケープタウンでは、アパルトヘイト撤廃を唱え続け戦ってきたネルソン・マンデラが、アパルトヘイト政策を打ち出していた、当時の南アフリカ政府により終身刑を宣告され、27年間の獄中のうち、18年間も収監されたロベン島が12キロ沖合に見られます。マンデラは1995年、南アフリカ大統領に就任し、民主化の急速な展開によって、南アフリカは340年にわたる白人支配に終止符を打ちました。1992年にはノーベル平和賞を授けられています。現在はユネスコ親善大使として、貧困に苦しむ子供達のために尽力しています。

7. ケープ半島

南アフリカ観光のハイライトとして人気の高いケープ半島は、インド洋と大西洋が出会う岬として知られています。アフリカ大陸最南端のケープ半島に位置する喜望峰。喜望峰を発見したウ「アスコ・ダガマが、東方航路(インド航路)を発見した記念に、「ポルトガルに希望を」と願いをこめて”Cape of Good Hope”喜望峰となづけたのだそうです。希望峰へ行く途中の海岸では鯨を見たり、インド洋側のボルダービーチでは沢山のペンギンにであったり、また南アフリカの輸出品として有名なワイナリーを見学したり、テーブルマウンテンにロープウェイで上りハイキングをし、国立植物園では珍しい花々を見たり、アフリカの大自然を満喫いたしました。10日間の旅行はあっというまに過ぎて、忙しかったけれどすばらしい思い出を作ることができ、実り多い旅となりました。

8. 南アフリカにあふれる韓国製品と中国製品

それにしても、中国、韓国のアフリカでの存在感が強く印象に残りました。空港や観光地ではどこへ行っても中国人、韓国人でいっぱい、たとえばTVなどは韓国のLG、車は韓国のヒュンダイ、携帯電話に至っては、やはり韓国のサムソンが圧倒的なシェアを誇っているそうです。

中国製の電化製品には SONY と紛らわしい SONNY という商品が堂々と出回っており街中いたるところに中国製品があふれている感がありました。勿論、一般常識として、それらの国がアフリカで目覚ましい進出、活躍していることは知っていました。そこで、今回改めてそれらの国々とアフリカとのかかわりをしらべてみようと思ったのです。

9. アフリカ大陸

アフリカは面積でいうと、日本の約80倍の大きさです。植民地として長く虐げられ、独立後もアフリカの総人口の半分は1日1ドル以下で生活する貧困、また、内戦、難民など飢えや病気の流行、十分な教育を受ける機会に恵まれない、そして汚職と、沢山の問題を抱える大陸です。他方、アフリカは豊富な天然資源に恵まれており、貿易や海外からの投資などによる、経済成長の大きな可能性を有しています。

10. 現実のアフリカ

現実のアフリカはここに来て高い成長を続けています。特に南アフリカはヨハネスブルグやケープタウンにしても、インフラが整備され、道路やビルなど普通の都会とかわりありません。水道水も直接飲んでも大丈夫とのことでした。しかし、ここでもエジプトと同じで、職を求めて人口が集中し、ヨハネスブルグの市の中心部では治安が悪化し、単独行動はしないよう言われました。

11. アフリカの新しいキーワード

アフリカは今まで何もかも足りない大陸であったが、いまや3億人の新たな中流層の、途方もない需用が、あらたなるビジネスチャンスを生み出そうとしており、この成長の主たる原動力が、原油やダイヤモンドなどの資源輸出ではなく、内需の急拡大で、ものやサービスに対する民間消費の急増によるものなのです。"アフリカの新しいキーワードは消費だ"ともいわれています。

12. アフリカの天然資源

勿論、アフリカの成長を先導してきたのは、何と言っても豊富な資源であり世界のプラチナ埋蔵量の75%、ダイヤモンド50%、コバルト50%、クロム50%、ボーキサイト25%などがアフリカに集中しています。そしてもう一つの魅力は、市場としての可能性で、2010年、約8億6000万人のアフリカの人口は国連の試算だと、2050年には17億5000万人まで膨らみ、世界人口に占める割合は、12%から19%にまで高まると見られています。

13. アフリカの“若さ”

さらにもう一つ、アフリカには“若さ”があります。急速に進む少子高齢化は日本などの先進国だけでなく、一人っ子政策をとってきた中国でも、今後の成長を阻む大きな懸念材料になりつつあります。人口構成の中位置は、日本44歳、アジア28歳に対し、アフリカは19歳。一人当たりの

所得はまだ低いですが、人口の大きさを考えると、ビジネス規模はばかになりません。

14. 頭脳流出、頭脳流入

アフリカというと、汚職や統治の欠如で悪名高いが、中には積極的な投資化の後押しで、インフラ整備をした国もあり、国外で教育訓練を受けたり、国外留学から帰国した人たちの企業家達が、いまや大陸を作り変えようとしています。

最貧国(フルンジ、マラウイ)からは、今も慢性的な頭脳流出が続いていますが、ガーナ、ボツワナ、南アフリカ、ナイジェリアなど、経済活力のあふれた国では、前例の無い頭脳流入が始まっています。

15. 製造業を阻む電力不足と安価な輸入品

今後の経済成長に必要な消費を刺激するためには、安定雇用を生み出せる製造業が必要なのに、電力不足のためそれが育ちません。電力の供給が安定すれば、工場の生産性があがり、投資も呼び込みやすくなります。

しかし、広大なアフリカ内の輸送コストもネックとなっており、製造業の発達を阻んでいます。また、中国やインドから安価な輸入品が急増しているのも、製造業が育たない理由でもあるようです。資源という一次産品頼みから抜けだし、雇用増につながる製造業をどう構築したらよいか、アフリカの重い課題であるようです。

16. 韓国とアフリカ

韓国政府はアフリカ援助をさらに強化し、特にエネルギー資源、IT、建設インフラ、農林水産業、グリーン成長の5分野に対し、政府開発援助(ODA 規模)を増やすことに決めました。

官民合同で、アフリカ諸国の中・長期エネルギー・マスタープラン策定を支援し、新たに12か国の経済開発計画を、特に水資源管理、電力などのインフラを重点的に支援拡大することです。

最近は今までの”安かろう、悪かろう”の概念を変えて、市場に食い込んできており、日本はもっと製品開発を、韓国以上に努力しなければいけない状況にあります

17. 中国とアフリカ

さてここで中国についてお話しします。

2010年10月の、”中国とアフリカの経済貿易報告”によると、中国はいまやアフリカにとって最大の貿易パートナーとなり、50あまりのアフリカ諸国に支援を提供し、住宅や、農業、水利、交通、医療などの分野で800あまりのプロジェクトにかかわり、今後も、貿易、投資、インフラ整備、発展能力向上、民生改善、金融、観光などの分野でも協力し、国際政治経済に重要な役割を果たすとしています。

18. 中国の戦略と人海戦術

アフリカは世界に残る貴重な投資天国と中国は見ており、日本人にとってリスクと感じる

ことも、彼らにとっては“好機”と映っているようです。

中国は紛争や圧制国家など、問題を抱えたりリスクの多いアフリカの国に、積極的に入りこんで行動し、海外進出を狙う自国企業を支援するといった、最初の目的である天然資源を持ち去るやり方が、中国の戦略と見られています。

中国の“援助”と称するその特徴は、援助マネーでインフラ設備を次々と作り、大量の中国人をアフリカ諸国に低賃金で送り込むという、人海戦術です。

たとえば、中国はケニアにさまざまなインフラ整備を援助し、ケニア政府は60箇所の油田開発を認めました。こういう現象はケニアに限らず、アフリカ大陸を拠点にする中国人は推定100万人。域内の乗り換え拠点になっているエチオピアや、ケニア、南アフリカの空港は出稼ぎや観光目当ての中国人で、連日ごった返しているそうです。

日本や欧米の、現地下請けが普通なのとは正反対のやり方であり、しかし、中国の工事は早くて安いと、おおむね好評なのだそうです。

19. 中国の資源外交

中国がアフリカに、なりふり構わぬ“資源外交”を繰り広げていることは周知の事実であり、今まで中国がアフリカ諸国で確保した原油総量は、47億バレルを上回り、なおかつ現在、ナイジェリアの推定石油埋蔵量の6分の1にあたる60億バレルの量をねらって、オランダ、アメリカ、フランスなどと石油利権を競り合っています。

資源の開発は石油鉱物資源のみならず、木材の伐採、漁獲資源(あわび、ふかひれ)動物資源(サイなど、漢方薬に使う)にも及んでいます。

アフリカ最大の人口を擁し、石油等の資源国であるナイジェリアの首都ラゴスでは、経済フロンティアとして世界の注目を集めており、街中建築ラッシュで、最近では中国や韓国の新興企業が急速に進出しているとのこと。

20. 顰蹙を買う中国

中国のアフリカ進出が国際社会から顰蹙を買っている理由のひとつとして、中国資本進入に現地の人々がさほど雇用されず、中国から大挙して押し寄せる労働者による、資源の略奪、搾取が行われるのみであり、安い中国産があふれすぎていて、結局すぐ駄目になり、また中国産のものを買うというサイクルが続いているとのこと。

安い中国製品の普及で、国産の紡績、繊維産業は壊滅的な打撃を受けており、単価が下がったせいもあり、現在の売り上げは1980年代に比べ半減しているそうです。

中国は国内で10%前後に近い経済成長を遂げながら、数億人の国民が定職を得られず、アフリカはそんな中国人の有望な出稼ぎ先となっているのです。

21. 中国に対する排斥運動

最近、アフリカ、特にザンビアやスーダン、エチオピアでは資源が売れても、その収入は多くの場合、腐敗した政治化や官僚の間に消えがちで、言語の違いや労働条件の厳しさが元で、中国人の排斥運動が高まってきており、地元民による中国企業や中国人を襲撃する事件が増加しています。

それに対し中国政府は、アフリカに進出しようとしている企業や労働者をびびらせないために、“事件によって中国の対外進出はなんら影響を受けない”と力説しています。

近年では“豊かな中国”を目指して、中国の広州に常時20万人のアフリカ人が流れ込

み、居住するという逆現象がおき始めているそうです。

22. アフリカの経済成長

アフリカの都市面積の拡大ペースは世界一であり、急速な都市化は工業化の推進とその規模の経済を通じて、成長を一気に加速させています。

アフリカが経済成長するには消費を刺激しなければならず、その消費のためには安定した雇用と収入が必要で、その労働力を必要とする製造業などの産業が欠かせませんそのためには安定した電力供給が必要です。

アフリカはまだまだ足りないものばかり。つまり、全てが成長分野であり、アジア(中国、インド、ベトナム)の件費高騰の原因もあって、アフリカほど儲かる国はないともいわれています。

しかし、IMFの統計によれば、数々の進歩にも拘らず、アフリカで企業を運営する困難とコストは汚職もひどく、これまた世界一といわれています。

23. 日本とアフリカ(農業)

日本政府も円借款で水利施設など、政府援助をしてきていますが、中国の圧倒的な勢いに、このままだと日本の居場所がなくなるのではと、多くの専門家が感じているようです。

タンザニアでは日本の円借款で作った灌漑施設を利用し、稲作技術を普及、米の収穫量は以前の3倍になり、農家を始め、周辺の加工、流通業者が潤ったという事実があります。

アフリカが農業の生産性を向上させ、食糧輸入を減らすことが出来れば、食料国際価格の安定につながり、やはり食料の多くを輸入に頼る日本にとっても、食糧安全保障の観点から、アフリカの農業を支援する意味は大いにあります。

24. 日本とアフリカ(製造業)

同じタンザニアの北部、アルーシャ郊外では、住友化学が出資して、防虫蚊帳の製造工場が軌道に乗り、従業員など約10000名、特に女性の雇用創造の場としてタンザニア経済に大きなインパクトを与えています。

周辺の地域を安定させ、従業員の生活をケアすることは、現地で企業活動を継続させるための大前提であり、利益を還元することで、長期の良好な関係が築けているのですとはいえ、不安定な電力供給、道路網等の未整備などを背景に、アフリカでの製造業が育ちにくいというのも事実です。

25. アフリカからの輸入品

アフリカは今や、日本に対して重要な輸出国であり、アフリカのレアメタルのタンタライの輸入無しには、携帯電話もDVDも、パソコンも生産できないのが実情であり、自動車の排ガスを浄化するのに使用される、白金、車体用に銅板を強化するためのクロムなどの輸入がアフリカから途絶えてしまえば、日本の自動車産業は成り立ちません。

魚(たこ、いか、えび、まぐろ)や、くだもの(グレープフルーツ)から、ワイン、コーヒーなどもアフリカ産のものがスーパーで売られています。

26. 積極性にかける日本

色々調べて感じたことですが、日本はアフリカに対して、否定的な情報に引っ張られ過ぎるのではないかと。"貧困と混乱のアフリカ"のイメージをそのまま持っているようで、現在のアフリカを知ろうとしなさ過ぎるようでした。

石油が出る地域は外国人が狙われて危ないとか、退避勧告を出しているのは日本だけであり、アフリカでは日本のビジネスマンは、概して用心深すぎて冒険心が無く、決断出来ないと見ているようです。

たとえば、投資条件を日本企業と中国企業に話をすると、中国は翌日には関心表明をするが、日本企業は"東京に問い合わせないと返事が出来ない"と言って、結局そのまま。日本がアフリカでビジネスを成功させるには、どれだけ長く、深く関わる覚悟があるかにかかっていると思いました。

27. 中国外交の真髄

日本の対中国のODAは1980年以来、24年間で3兆3000億といわれ、それを中国は中南米やアフリカに、武器援助を含めて、相当額をまた貸していたといわれています。1980年代のイラン・イラク戦争期間中での最大の武器供給国は中国であり、2005年12月までWFP(国連世界食料計画)からの食料の援助国でありながら、アフリカへの投資と援助をしていたということです。

しかし、中国外交の真髄は国家首脳が1995年から2009年まで13回に亘り、ほぼ毎年アフリカを訪問しています。

日本のアフリカ外交も中国のように、政府要人がもっとたびたび訪れ、アフリカの重要性を知る必要があるのではないかと。そして、援助だけではアフリカの問題は解決しない中国のように、投資、貿易を促進する方法に転換する必要があるのではないかと感じました。